

## 2023 年度 大谷大学文藝コンテスト

### 【エッセイ・小説部門】総評

審査委員長 國中 治

三年以上にわたって世界を席卷した新型コロナ・ウイルスによる災禍。その束縛もようやく解けてきたようだ、というのが今回の応募作品を見渡したときの第一印象である。もちろんコロナ・ウイルスに感染・発症して大変な目に遭っている人は現在も大勢いるし、コロナ対応のルールには地域や組織によって大きな差異がある。日常生活に何らかの制約を課されている高校生も少なくないだろう。

しかし今回の応募作品を一言でいえば、昨年度よりぐんと賑やかになっていた。冗舌とか派手とかいう意味ではなく、発想と表現が多彩になっていたのである。これはやはり、発想と表現の土台となる作者の感性や思考が今年はかなり自由になったことの証左ではないだろうか。まだあちこちに規制は残っているものの、それでも全き自由に向けて扉が一つずつ開かれていくのを、高校生たちは日々実感しているのではないだろうか。これは楽観的にすぎる見解かもしれないが、さまざまな事象・現象との接触を新鮮な出会いとして受けとめている十代の人々の表現は、それを審査する私たちの胸裡にも清らかな空気を注いでくれる、喜ばしいものだった。

さて、今述べたように今回の応募作品は多彩であった。ということはすなわち作品ごとに別々の美点や特徴があったわけで、エッセイ、小説とも審査は難航を余儀なくされた。結局、両部門とも落ち着くべきところに落ち着いた観はあるものの、選に漏れた作品のなかにも捨てがたい佳品が何篇もあった。そこでここでは、選外となった作品も視野に入れつつ応募作の全体像を振り返ろうと思う。

まず、エッセイ部門。歴史・芸術・科学・思想などとの新たな出会いに触発されて自己の存在意義を問い直し、そこから自分なりの人間観・人生観・世界観を素直に、しかしときには大胆に展開するいくつかの文章は、観念的でありながらも瑞々しい魅力を湛えていた。語り方に工夫を凝らした文章も刺激的で面白かった（メタフィクションといえるような高度な文芸テクニックを駆使した作品まであった）。だが内容より表現に重きを置く書き方は、エッセイより創作の方にふさわしいものだ。特に実験的な手法を採用する場合には。

海外留学や施設訪問などを題材にしたエッセイも、新しい出会いによって人間的に成長していく若者の姿が清々しく、好ましい出来栄えの作品だった。こういうエッセイの書き手は信頼できる人物だと思う。ただしこの好感度の高さや信頼感をもってしても、独創的な思索をくりひろげた何篇かのエッセイには及ばなかった。表現の面で見劣りするわけではない。とはいえ、鬼才は秀才より衆目を集めやすいのである。

次に小説部門について。小説はエッセイ以上の多彩さであった。単独でも賑やかな作品がいくつもあるので、逆にストイックなモノトーンの作品が目立つほどだった。題材が日常生活であっても非現実世界であっても、登場人物が多くても少なくても、物語の根底を支えるのは描写と構成である。波乱万丈の物語を制作する際、その物語が展開するスピードにつられて、あるいはそのダイナミズムに没入するあまり、場面を構成するさまざまな要素の描写がおろそかになることがある。このちょっとした手抜きが、しかし作品世界のリアリティを台無しにしてしまう。注意してほしい。また構成に関しては、もう少し冒険をしてみてもいいのではないかと感じた作品がいくつかあった。冒険というのはたとえば、物語の展開を時間の推移とは異なる基準で配列し直したりすることである。ともあれ小説創作を志望する人には、作品をいったん書き上げたあと、描写と構成の二点を特に意識して見直す習慣をつけてほしい。

ところで今回の小説部門には、オムニバス形式の作品もあり、この小説を構成する三つの短篇のうち少なくとも二つは散文詩と呼びうる精妙な小品であった。畑違いの観もあって受賞には至らなかったが、作者は詩的な感受性と表現力を備えている人なのだから、次は詩誌への投稿など試みてはどうだろう。

なお、エッセイ、小説の両部門を通して注意していただきたいことが二つある。一つは原稿の書き方。改行する際には行頭を一マスあけるなど、基本的なルールは守ってほしい。今回、題材の特異性と表現の緻密さが高評価を受けながら作中に改行が一つもなかったため、原稿用紙の使い方が不適切であるとして選外となったエッセイがある。残念でならない。もう一つはタイトル。思わずページを繰りたくなるような魅力あるタイトルもあったが、作品を自ら貶めるような貧相なタイトルもあった。内容との齟齬が露わなタイトルもあった。タイトルも作品の一部。しかも最も目立つ部分である。締切まで時間がなくて急いでいても、タイトルをおざなりにしてはいけない。